

ニュース JAFIC EYE No.127

小木での水産関係者との意見交換会

1 はじめに

平成 31 年（2019 年）3 月 19 日に小木にて水産関係者 63 名が参加して意見交換会「スルメイカ秋季発生系群の資源状態と漁況予報をめぐって」（表 1）が開催された。冒頭で、スルメイカの漁獲が減少して価格が高騰する状況で、国際イカ加工原料となったアメリカオオアカイカをめぐり、IUU（違法・無報告・無規制）漁業問題を抱える中国が漁獲したイカが日本市場にも影響を与え始めていることが報告された。このような厳しい背景のもと、①今年の秋季系産卵系群の資源状態と漁業の状況、②石川県の調査船調査の長期データの解析結果の紹介、③冬季発生系群の資源状況、等について各機関からの報告を受け意見交換が行われた。

2 スルメイカ秋季発生系群の資源評価

近年は 2014 年以降、減少傾向にあり、2018 年は中位水準と判断された。今年度の資源評価では、2018 年の親魚量が Blimit（再生産成功率が高い時に高い加入量が期待できる親魚量）を下回ると推定されたことから、親魚量を Blimit 以上に回復することを目標とするシナリオとした。近年の調査では、秋季の産卵場付近の高水温化が原因と考えられる山陰～東シナ海北部での幼生分布量の減少や、2000 年前後以降の再生産成功率の低下が認められた。このほか、現状の評価では中国や北朝鮮による漁獲が考慮できていないことで再生産成功率が実際より低く見積もられていることも考えられる。関係各国間の協力による評価・管理が必要である。

3 スルメイカ秋季発生系群の漁海況の経過と長期予報の検証

秋季発生系群では 5～6 月の漁況は前年を下回り、6～7 月の漁場一斉調査でのスルメイカの密度も前年を下回った。しかし、7 月に漁獲が持ち直したことから、全体としては不漁の前年並としたが、予測とは異なり前年を下回った。①道北・道央では、同海域の漁獲量が例年と比べ多かった前年を下回ったものの、近年平均を上回

表 1 意見交換会プログラム

●話題提供・意見交換

主旨説明 スルメイカの資源変動と漁況予報の視点から：酒井光夫（JAFIC）

1. スルメイカ秋季発生系群の資源評価：久保田洋（水産研究・教育機構 日本海区水産研究所）
2. スルメイカ秋季発生系群の漁海況の経過と長期予報の検証：宮原寿恵（水産研究・教育機構日本海区水産研究所）
3. 1970 年代末以降のスルメイカの資源変動と魚体サイズの変化－調査船白山丸の過去 41 年間の調査結果－：四方崇文（石川県水産総合センター）
4. スルメイカ冬季発生系群の資源状況：代理発表 久保田 洋（水産研究・教育機構 日本海区水産研究所）

●全体意見交換 司会：酒井光夫（JAFIC）

り、10 月に集中した漁獲が見られた。②道南・津軽では、漁獲量は前年および近年平均を大きく下回り、不漁であった前年の 2 割程度の漁獲量に留まった。③本州北部日本海、西部日本海は、今漁期の 12 月については、例年見られる漁獲のピークは出現せず、前年および近年平均を下回る漁獲となった。

4 1970 年代末以降のスルメイカの資源変動と魚体サイズの変化

現代的な装備で調査が行われるようになった石川県の調査船白山丸による過去 41 年間のイカ釣試験操業の結果を整理し、資源水準、魚体サイズ、回遊時期の変化について検討した。資源水準を代表する CPUE（釣機 1 台 1 時間当たりの漁獲尾数）を標準化した結果、1980 年代初頭から中頃に低下し、1980 年代末から 2000 年代初頭に上昇し、その後、低下する傾向が見られた。8～10 月の魚体サイズは 1980 年代中頃まで小さく、1980 年代末から 2000 年代初頭には大きく、それ以降、小さくなっていることが分かった。2000 年代以降の魚体の小型化は成長の季節的な遅れと成長速度の低下によるものと考えられた。南下回遊時期は、1980 年代中頃や 1990 年頃よりも遅い。従って、成長が遅れているだけでなく、1990 年代中頃以降、南下期にも遅れが生じていると考えられる。1980 年代以降の秋冬季の水温上昇にともなってスルメイ

カの生活史全体が季節的に遅れたものと考えられた。

5 スルメイカ冬季発生系群の資源状況

2015 年以降資源量は減少に転じており、2016 年以降の資源量は低位水準にあると判断されていた。主産卵場である東シナ海における水温環境との関連を検討した結果、2015、2016 年の水温環境はスルメイカの生残にとって不適であったと見られた。この影響により資源量は大きく減少したと考えられた。2017 年の水温環境は平均的であり、2017 年の資源量はほぼ横ばいで推移したものの、2018 年の水温環境は再び不適となり、その結果、2018 年の資源量はさらに減少したと考えられた。2018 年に実施された調査結果は、いずれも近年平均を下回り、資源の減少を裏付ける結果となった。

6 全体的意見交換

各講演にかかる主たる質疑応答は下記の通りであった。

- 1) 標識放流の回収法は？：貴重なデータを得るためには漁業者からの回収率を高める工夫が重要であることが指摘された。
- 2) 昨年に比べて境港で 1-2 月に水揚げが増加した要因は？：山陰での漁獲の増加について、一昨年に鳥取沖の冷水の差し込みと考えられる漁場形成が考えられたが、今年は特に目立った冷水の差し込みはなく原因は検討中である。
- 3) 白山丸調査データの標準化 CPUE には集魚灯やイカ釣機などの技術革新に係る説明変数は入っているか？：数値化が難しく入っていない。これらを考慮すれば実際の資源水準は現状よりもかなり低いと思われる。

総合討論ではさらに下記の追加情報が報告された。

- 1) 最新の北朝鮮船の情報：全国いか釣り漁業協会の川口会長から、北朝鮮の違反操業ならびにそれに関係した韓国・中国の情報が報告された。
- 2) アカイカ情報：前述川口会長ならびに酒井からスルメイカの代替釣り漁業として北太平洋のアカイカ漁について追加報告があった。スルメイカとは異なる漁法・漁場であることから、アカイカ漁参入の場合には事前に十分な情報収集が必要であることが付け加えられた。（酒井光夫）